

熊事研会報

第113号 平成25年12月10日

発行者 熊本県学校事務研究協議会
会長 藤川 英一
編集代表 事務局長 上田 千浩
〒860-0001 熊本市中央区千葉城町5-2
Tel 096-353-6417 Fax 096-353-6421

第39回熊本県学校事務研究大会を終えて

師走に入り、会員の皆様におかれましては、慌ただしい日々をお過ごしのことと拝察いたします。

さて、本年度も10月23日（水）・24日（木）に第39回熊本県学校事務研究大会を「変革の時代に対応する学校事務の創造～子どもの豊かな育ちを支援する学校事務～」をテーマに開催しました。参加者総数こそ567名と若干昨年度を上回りましたが、県内参加者は昨年度並みでした。今後は参加時期、研究内容を含めて参加者のニーズに出来るだけ応えられるよう検討していきたいと思っています。

1日目の全体研究会は、第1部を「行政説明」、第2部を「共同実施の現状と展望」をテーマとしたパネルディスカッションの2部構成で行いました。はじめに、任用制度と事務センターについて県教委の説明を聞き、次に、現在の共同実施について他県の状況を参考にし、これからの取り組みについて考えるという流れで構成しました。

第1部では、熊本県教育委員会学校人事課小中学校人事班の井手正直主幹に、「行政説明」をしていただきました。前半は本年度より変更となった任用制度についての説明、後半部では来年度から一部地区で先行実施される学校事務センターについての説明でした。

当該地区の会員にとっては、すでにご存じの内容のこともありましたが、県教委から直接話を聞くことで、今まで知り得なかった情報も若干ではあるが得ることが出来たのではないのでしょうか。また、関係地区以外の会員にとっては、初めて耳にすることばかりであったことと思います。今後、それらの地区の動向については、熊事研として情報収集を含めて注目していきます。

第2部では、佐賀市立城南中学校統括事務長併任佐賀県教育委員会東部教育事務所副所長の古川治氏、佐伯西学校支援センター所長の甲斐浩一氏、五ヶ瀬町学校支援室室長の福川安博氏をパネラーに迎え「共同実施の現状と展望」をテーマとしたパネルディスカッションを行いました。

他県の現状を知り参考にすることで、今後それぞれの共同実施で、具体的な取り組みが進められていくと思われます。研究部としても今研究大会をスタートとして、研究をすすめていきたいと思っています。

2日目は、5地区と研究部を合わせた6本のレポートを、テーマ別に3つの分科会に分けて構成しました。当日の運営は全体的に円滑にいったと感じています。各地区からの実践発表についてはどれも素晴らしい内容でしたが、討議の柱についての論議は、設定や進行方法等を含めて考えていく必要があると思いました。

第4分科会では「学校事務ステップアップ講座～コーチングを学ぼう～」と題して参加体験型の研修方式で開催しました。参加者のアンケートを見ると概ね好評だったようです。今後は、更

に会員皆様のニーズに即したものを開催出来るよう検討していきたいと考えています。

今大会の開催のためにご後援、ご協力いただきました熊本県教育委員会、熊本市教育委員会、熊本県市町村教育委員会連絡協議会、熊本県小中学校長会、熊本県PTA連合会、日本教育公務員弘済会熊本支部をはじめ関係各位、講師、県外からのパネリストや助言者の皆様に心より厚くお礼申し上げます。また、大会運営に携わっていただいた発表地区の皆様、大会協力員の皆様にも心よりお礼申し上げます。皆様のおかげで今年度の大会も成功裏に終えることが出来ました。ありがとうございます。

来年度の大会は、11月18日（火）・19日（水）に熊本市内の複数の会場で開催する予定です。第40回という節目の大会でもあります。内容が更に充実したものになるよう役員一同で力を合わせ、皆様からいただいたご意見をもとに、より満足していただける大会運営をめざして努力してまいります。

最後になりましたが、これから本格的な寒さに向かいます。会員の皆様には、くれぐれもご自愛いただき職務に、各地区研での研究に益々精進していただきたいと願っております。私たち役員一同も、会員の皆様の要望に応えられるよう精一杯努力していく所存です。

それではみなさま、良いお年をお迎えください。

熊本県学校事務研究協議会 研究部長 内田 貴博

第39回研究大会分科会の記録

第1分科会「学校経営と学校事務」

分科会記録者（天草地区：緒方敦子、研究部：佐藤紘史）

1 レポートの概要

第1レポート（天草地区）では、上天草市小中学校事務職員会が上天草市発足から現在に至るまで、市教委と連携、協同による学校事務改善の取り組みや研修体制の確立、規程及び要綱等の整備など、事務職員主導のもとに市教委と関わってきた経緯があります。こうした、自分たちの手で行政と連携・協同して学校事務を創造していくことは「共同実施や事務のセンター化といった新しい学校事務のあり方」に対する一つの手段となるのではないか、ということについての発表でした。

第2レポート（研究部）では、県下全域に行った共同実施の実態調査アンケートから、共同実施導入から5年が経過した現在における課題を明らかにしています。その中で、個では出来ないこと、気づかないことや、課題解決のためそれぞれの共同実施組織を活かして出来ることなど、これまで行ってきた共同実施への意識を変える必要があるのではということ、そして、これからの共同実施の可能性についての発表でした。

2 分科会の流れ

（午前：天草地区）

天草地区第1レポート発表の後、休憩をはさみ、レポートに関する質疑応答、意見、感想を出

してもらい、発表側から会場への発問を行い、回答をいただきました。その後第1レポートについて助言者より簡単にまとめをしていただきました。

(午後：研究部)

研究部第2レポート発表の後、レポートに関しての意見や感想を出してもらい、質疑応答を行いました。

その後休憩をはさんで、総括討議を行いました。総括討議では発表者から会場へ意見を求め、助言者によるまとめをし、閉会しました。

3 研究内容とかわされた討議

(午前：天草地区) 討議の柱：市町村合併や共同実施開始後の各地区研修会の推進について
会場より、「校長会・教頭会との連携や、それらへの研修報告等はしているか。」の質問に対して「以前の上天草市校長会の中に事務職員会担当の校長がおり、その方を通じて了解を得ていた。会長が、校長とつながりが持っていたので、報告をしてもらった。」と回答がありました。標準的職務内容の規定については、制定までの流れや県の職務表との整合性について質問があり、「地教委へこちらから働きかけ、会員の意見を集約した上で、県から下りてきたものを削るような形で作成した。」との回答でした。共同実施の専決権や研修についても話題が及びました。

その他、天草市の合併後の研修や教育委員会との連携について報告がありました。広域なために共同実施単位で研修を行い、また標準的職務表は、天草市事務職員会から教育委員会や校長会へ積極的に働きかけ、制定したとのことでした。

「上天草事務研は会長を核とした組織体制があるので、地教委とうまく連携がとれるのではないか」「旧市町村より実施されていた研修を引き継ぎ、共同実施とは別で研修があり、研修がより深まっているのではないか」との意見も出ました。

(午後：研究部) 討議の柱：現在の共同実施とこれからの共同実施について

会場より、「全体会のパネルで各県の状況を聞き、熊本では県教委がセンター化を進めていく中で熊事研も何らかの形で関わっていくという意識が必要なのでは」という質問が出ました。研究部の回答は「それぞれの現状で課題と成果はあるが、現在の共同実施でも出来ることあると思っている。指標となるものを研究部としては示していないが、共同実施の可能性、理想とする取り組みについて研究を進めていきたい。」でした。助言者からは「県教委主導での共同実施やセンター化だが、やらされる意識ではなく、主導権を握る、利用するという意識で取り組んでいくべき。個人の意識が大事。自分たちで考えて取り組むと達成感、やりがいがある。自分たち主導でやるという意識があれば足元がぐらつくことはない。」と回答いただきました。

他に「共同実施の中にあるすべての学校をひとつの学校と考え、自分がなにをしたら学校がうまくいくのか、良くなるのかを考えていく必要がある。」という意見がありました。また、「センター化に対する不安に対しては、自分たちで考え、熊本の共同実施がどうあるかを協議していくべき。地域からのニーズを共同実施でくみとり、共同実施の組織は事務職員だけで作る必要はないのではないか。」「共同実施主任研修のモデル資料を作ってほしい。共同実施ケース案の研究をし、自分たちから提案し、意見をまとめ人事課に提示できるような研究をしたらどうか。」という意見もありました。

(総括討議)

討議の柱：学校を取り巻く組織との連携を通して今後の学校事務の展開を進めるためには

会場から、やる気の問題であると気づかされた等意見がありました。また、共同実施のスピー

ルと評価という意見が多く出ました。会場から共同実施を評価する共同実施推進協議会について意見が出ました。助言者から「学校運営協議会の構成は学校事務職員、校長、市町村教委等で構成されており、市町村教委、県教委の順に評価を実施する機関があり、また、県教委も含む共同実施主任会があるため、そういった所で、やりがいを持ってやっているというアピールを逐一しなければならない。校長会も教育委員会もうまく利用してアピールする。共同実施としてのアピール、事務職員でなければならないというアピールをする。仕事の必要性を言えるようにならないといけない。」という、評価に対するアピールの必要性を助言していただきました。

4 助言者のまとめ

(天草地区討議まとめ)

共同実施を推進する上での教育委員会との連携の重要性を強調されました。「諸規定の整備など学校が動きやすいよう、学校からすすんでひな型を提案すべき。」「これからの共同実施は型にはまらず、いろんなことに取り組む意識が大切であり、周囲からの認識を得るため、共同実施や地区研修会を通じて周囲にアピールすること。」「学校を離れることは当たり前とする制度の確立をしていく必要がある。」等、学校のための事務職員であるためには、地域へ出ていくべきであり、その地域に長期勤務している事務職員が、先導し連携をはかるとよいのではないだろうか、との助言を受けました。

(研究部討議及び総括討議まとめ)

「連携は共同実施のみに限らず、学校だけでもいい。それを近隣校や共同実施で広めることが大事。」「ただやってみたらできた。最初は労力、能力がいるが、それが当たり前になる。」「組織体制の良し悪しはなく、利用するものである。」「九州各県で、自分の共同実施が一番であろうと切磋琢磨し、広げ、学校のため子どものため何ができるか、最終的には学校に、子どもに還元できるかを考えるべき。」など、研修体制、連携の進め方、センター化へ向けてそれぞれの共同実施のあり方や心構え、共同実施は何をやりがいとし、何を目標とするのかといった指標を示していただきました。



第2分科会「教育条件整備」

分科会記録者（菊池地区：平川志穂 人球地区：馬氷美恵）

1 レポートの概要

第1レポートは、菊池地区の校舎建築や大規模改修に学校事務職員としてどのように関わり、どのように実践されてきたのか、そして学校事務職員の視点で考えた、校舎設備のチェックリスト（改訂版）作成の取り組みについて報告されました。このチェックリストを校舎建築や大規模改修を経験する際に拠り所となる資料として活用し、これを後輩につなげていきたいという願いを込めて、ここ数年、改訂版の作成を手がけてこられました。学校事務職員の視点で子ども達によりよい環境づくりを行っていきけるような実践報告となりました。

第2レポートでは、学校事務職員という立場から考えた環境について、事務室だよりを発行し、職員へのアンケート調査をおこなった結果から見えてきた成果と課題について紹介がありました。また、事務室だより発行をとおして学校事務のグランドデザインとの関連性やこれからの学校事務職員としての役割と課題について報告されました。

2 分科会の流れ

第1レポート発表後、まず質疑応答が行われました。その後、討議の柱を中心に質疑応答と討議を合わせる形で進められ、最後に助言者のまとめがありました。

また、後半最後の10分間を使って、菊池郡市教科等研究会事務部会条件整備部会で作成したソフトについて紹介がありました。

午後からは第2レポート発表の後、レポートに関する質疑応答、意見、感想を出してもらいました。

休憩をはさみ、県外から参加されている方に意見や感想を求め、助言者に簡単にまとめをしていただきました。その後、総括討議をおこない、司会者から会場へ意見や感想を求め、助言者によるまとめをし、閉会しました。

3 研究内容と交わされた論議

（菊池のレポート）

午前中は、討議の柱「事務職員が教育条件整備に主体的に取り組む意義」を中心に討議が行われました。意見としては、「学校事務職員が、設計から校舎建築まで主体的に関わり、児童・職員・地域住民とのワークショップ等、色々と意見交換したり、建築士・教育委員会と協力して安全で円滑に子ども達が学校生活を送っていきけるような環境をつくっていくことが大切だと思う。」また、「きつい思いもしたけれど、やりがいもあったと今は思う。最終的には、学校事務職員が情報を集め、中心になり、教育条件整備を行うことが私たちの仕事である。」というものでした。私たち学校事務職員が教育条件整備に主体的に取り組む意義は、『自分たちが中心になって子ども達の学びの環境の保障を確保すること』ではないかとも発言され、その言葉がとても印象的でした。

さらに昨年からの統廃合に関わってこられた経験年数の浅い方からは、自分の貴重な経験を語られ、「統廃合に関わった時には、予算はすでに決定しており、要望をあげてもデザインを重視され、課題の残る校舎建築であった。このレポートにもっと早く出会っていたらよかった」という意見もいただきました。またチェックリストに関しては、「このようなチェックリストを初めてみた。」「とても参考になる。」という意見もいただきました。

（人吉・球磨のレポート）

会場から、自分の取り組みや悩み、課題等の意見のなかで、職員へ向けての節約意識の啓発に

どのような手段が有効なのか、また、職員とのコミュニケーションの取り方について出されました。それに対し、いつも整理整頓に心がける、具体的に使用例や金額を表示する、事務室のドアを開放する（話しやすい環境をつくる）、といった意見がありました。また、事務職員が児童生徒と一緒に委員会活動に参加したり、授業の中で話をするすることで、児童生徒の意識の向上のため大切なことではないかという声がありました。

県外から参加された方からも日頃の実践を含め、事務室で出来る仕事を職員室でするとコミュニケーションも取りやすいのではないだろうかとのアドバイスを出していただきました。

4 助言者のまとめについて

（菊池のレポートに関して）

「大規模改修や校舎建築に関しては、ほとんどの学校事務職員が事務職員人生のうち1度あるかないかの経験ではないでしょうか。そのような時にこのチェックリストの作成・活用の意義があると思います。『子ども達のために少しでも良い教育環境を整えたい』という思い、『自分たち、学校事務職員がしないと進まない』という使命感で取り組みをされていて、非常に価値のある仕事だと思いますし、敬意を表したいと思います。」という助言がありました。

（人吉・球磨のレポートに関して）

課題の一つである経費削減について、事務室だよりを利用して職員への啓発がよくできているが、人的環境整備については、難しい部分もあること、通常の典型的な事務処理に加えて空いた時間の有効利用、領域をひろげるためにも新しいことにチャレンジする事務職員としてのあり方を今後の事務職員の姿として示されました。また、事務職員だけではなく、校長、教頭、養護教諭は学校に一人職種であることをあげられ、得意分野でのコミュニケーションをはかり、誰かとつながって仕事をするのが大切である、と助言いただきました。



第3分科会「事務改善」

記録者（水葦地区：今福 文、山鹿地区：田中 元陽）

1 レポートの概要

【水葦地区】

水俣葦北地区の現状の説明があり、事務研でのグループ研修の持ち方が説明された。その中で、業務を計画的に進めたい、円滑に行いたいとの思いから業務日誌をつけて、日常業務の見直しや

スリム化を図ることを目的として研修のテーマとした。実践する中でそれぞれが感じたことや、楽しく目標達成に向き合えたことなどについて報告された。

【山鹿地区】

新採育成のために山鹿事務研が取り組んだことをもとに、今後ベテランの減少や新採の増加、盛んな人事交流に対応していくにはどうしたらよいかを考えた。グループ討議では、統合が進むことによる人員削減及び新しい人事交流を踏まえた事務研のあり方を考えた。

2 分科会の流れ

～（午前の部）【水葦地区】～

09:40～開会行事
10:00～第1レポート発表及び質疑応答
10:40～休憩
10:50～質疑と討議
11:30～助言者より感想及びまとめ
11:50～諸連絡

～（午後の部）【山鹿地区】～

13:00～第2レポート発表及び質疑応答
13:45～グループ討議
14:25～休憩
14:35～グループ討議内容発表
14:45～助言者より感想及びまとめ
15:05～総括討議
15:30～助言者より感想及びまとめ
15:50～閉会行事

3 研究内容と交わされた論議

【水葦地区】

業務日誌をつける取り組みを続けていく中で、それぞれが工夫して業務日誌を作成し、記入についても各個人のやり方や楽しみを見つけ続けていることが報告された。具体的な取り組みや内容などもプレゼンでいくつか紹介された。質疑では会員の経験や年齢構成の質問、続けていくことへの負担感なども出されたが、負担感なく続けられるよう工夫し、自己評価シートへのつながりも考えて活用できることも議論された。多くの方から出された意見を今後の活用に生かし、地区内だけにとどまらずさらにより良いものに近づけてほしいと助言者よりくくられた。

【山鹿地区】

レポート発表：ベテランの減少と新採の増加への対応として、「市教委にかけあって共同実施のベテラン・若手の偏りを調整した」という発表内容に対して、「共同実施の人員配置換えは法的に問題ないのか」という問いがあった。「市教委で手続きを踏んでいるため問題はない。しかし毎年変えるのは大変なため、次年度の配置について懸念はあった」との回答だった。

グループ討議：討議の柱を軸に各グループで討議を行い、その後司会から「所属する事務研で、新採を育てるためにどのような研修が行われているか」「新採研修以外も考えて所属する事務研の現状はどうか」「これはよかった・ためになったという研修、あるいはやってみたい研修はあるか」という問いかけがあった。これに対し「その地区ごとのベテランからのやさしい教授が心強かった」「関係法規などを一つ一つ理解した上で仕事をしたい」などの意見があがった。

【総括討議】

「質の高い事務職員・事務組織としての力量を高めるために、どのような実践があるだろうか」という討議の柱を軸に「日々の業務をどのように改善していくか」「理想とする事務職員像」について討議を行った。20代の若手から50代のベテランまで幅広い意見があがった。また、事務センターに勤務している県外からの参加者もあり、その現状や課題も聞くことができた。

4 助言者による感想及びまとめ

【水葦地区】

なぜ業務日誌という地味なテーマになったのかと思ったが、多忙化している学校現場から必要性が出てきたと感じた。以前であれば、一日どのように過ごすか、職員とどうコミュニケーションをとるかなどを考えるゆとりもあったが、人員削減やIT化、対応業務の多さなどから考えるとタイムリーな研究なのではないだろうか。レポートでは、情報量を増やし、自らの支えとなるものを作って、楽しさに気づきながら仕事ができていることに触れられ、自分の意志で工夫してできることが業務日誌だとしてあるが、さらにプラスアルファができることが魅力である。より良い日誌の作成につなげてほしい。現職時には、事務部経営案の資料に使い、経営案の一部を占めた取り組みの一つである。生かして行ってほしい。

【山鹿地区】

レポートの中で注目したのは市教委との関係。共同実施が始まってから関係が希薄になっていないか。市教委との二人三脚の関係を構築するのはとても大切である。また、アンケート結果で事務としての守備範囲の拡大を目指し、仕事に対するやりがいを感じている事務職員が多かったというのがあったが、校内での信頼を得るためにあえて自ら動き、働きかけ、意図的に信頼度を上げていく積極性も重要になってくると思われる。

【統括討議】

私達が目的をもって事務改善を始めれば意識が変わる。そして仕事を変える。更に学校現場、学校教育を変えていく。そのサイクルを大切に仕事に取り組んで欲しい。改善のための改善も悪くはない。しかしそれは始まりに過ぎない。それを足がかりに目標に向かって頑張ってもらいたい。



第4分科会 学校事務ステップアップ講座 ～コーチングを学ぼう～

講師 パーティープロ 代表 上島 榮一 氏

分科会記録 記録者（研究部：筒井迪子）

1 分科会の概要

本分科会は、講師の上島榮一氏の進行で進められ、参加体験型の研修形式で行われた。

2 分科会の流れ

午前中は、まず講師の自己紹介、コーチングについての紹介があり、コーチングを学んだりコミュニケーションを楽しく感じられるきっかけになってほしい旨を話された。前半は主に聴くスキルに関わる内容として、以下の3点について進められた。1点目はコミュニケーションの段階についての説明、2点目は相槌の必要性を実感させるペアワーク、3点目はコミュニケーションの事例研究を各グループで話し合って発表という流れで行われた。ペアワークからグループワークへとスムーズに流れ、とても和やかに様々な意見が出されていたようだった。次に主に話し方のスキルに関する内容として、「メラビアンの法則」の紹介、そして相手に聴いてもらうための日々の訓練の一つとして、滑舌を良くするための口の運動を実際に行った。みんなで一緒に大きな声を出すことでさらに表情がほぐれてきていたように感じた。

午後からは、ビジュアルストーリーを意識した話し方や、人のタイプを知ってコミュニケーションをとるヒント等が紹介された。また、コーチとして相手にどのような言葉を返すかという演習、最後にすべての参加者から印象に残ったことを発表してもらい、とても温かい雰囲気での研修となった。

3 研究内容とまとめ

「人は自分に関心を寄せてくれる人にものみ関心を示す」と言われるが、主に聴く時においては、フェイス・トゥ・フェイスで適切な相槌を打って、しっかりと相手の話を聴くことが肝要である。相手が話している時に自分の価値観を前面に出しすぎてしまうと相手は（最後まで話を聞いてもらえない。）という思いを抱き、話したくないと感じるようになってしまう。相手が全部話したと思えるくらいまでまず受け止め、その思いまでを汲み取る「要約の技法」が必要である。

話す時のコミュニケーションについては、メラビアンの法則にあるとおり、言葉の意味が7%、声の調子が38%、姿かたち・表情が55%である。7%の言葉の意味や話す内容も重要であるが、声の調子や表情等を疎かにしていると、どんなによい内容でもうまく伝わらないことになりかねない。人前で話すときに緊張して口が動かさずうまく話せなくなってしまうこともあるので、より円滑なコミュニケーションをとるために滑舌の練習はとても有効である。スピーチとビジネスでの話し方は違うものの、脳は聴覚からの情報よりも視覚的な情報を知識に落としやすいと言われているため、視覚に訴えるビジュアルストーリーといわれる話し方をすることが相手に伝わりやすいということを学んだ。

また、各人のコミュニケーションスタイルには主に4つの特徴があるという説明があり、参加者はそれぞれに合う接し方のヒントをいただいた。「様々な方法で相手にアプローチを試してみるといふふうに考えると、コミュニケーションを楽しめるようになってくるのではないか。」と

いう提言があり、今後の可能性が広がったように感じる事ができたように思う。

コーチングとは指示や命令、アドバイスがなくても自ら気づいて問題を解決していけるようになることを目的としたコミュニケーションスキルであるが、コーチとして話をするときには、相手の中に答えがあるということが前提にされている。例えば、私たちは日々「Aをするか。それともBをするか。」というような選択の問題に直面することが多い。そのような質問を受けたとき「Aをしたらどんなことが予測されるか。」「Bをしたらどんなことが予測されるか。」と相手に問いかけ、本人自身に話させるようにするというようなコーチの話し方、言葉の選び方等を学ぶきっかけが得られたように思う。このようなコミュニケーションのスキルアップは、学校事務職員にとって必要不可欠なものであろう。

これから個々が学びを深め、日々のコミュニケーションを意識して取り組んでいくことで、よりよいコミュニケーションや仕事につながっていくと考えられる。今後も様々な学校事務職員のスキルアップにつながる有意義な講座が強く求められていると実感する研修であった。

【参考資料】 当日の講師の配布資料より一部抜粋して引用

- あなたにとって、会話が不成立に終わる人ってどんな相手ですか？
- また、あなたの思いが、うまく伝わらない相手ってどんな方でしょうか？
- コミュニケーションの3つの段階
- なぜ最後まで聞いてくれないの？ まず受け止めてあげる
- グレン・V・エカレン著「豊かな人間関係を築く47のステップ」
ディスカヴァー刊より 抜粋
- コミュニケーションの事例研究
- 言ったつもりが、相手に伝わっていないこと、ありませんか？
- 口の運動 滑舌
- 「二つの話し方」
- 「説明」と「ビジュアルストーリー」
- 迅速を要求されるとき話し方
- 相手がこんなことを言って来たら、あなたはどんなことばを返しますか？
- コミュニケーションスタイルの特徴と見分け方 接し方



編集後記

熊事研大会特集号は、ほぼ原稿を並べただけ。研究部の皆様、お世話になりました。(き)